埼玉新聞

2024年（令和6年）5月25日（土曜日）

地域活性 役割を議論

産学連携5周年シンポジウム

埼玉学園大と埼玉高速鉄道

連携における地域での活動について報告する埼玉学園大の学生たち＝22日午後、川口市木曽呂の埼玉学園大学

埼玉学園大学と埼玉高速鉄道（SR）の産学連携事業5周年を記念するシンポジウムが22日、川口市木曽呂の同大で学生、地元企業関係者らが出席して行われ、産学連携の今後の在り方について話し合われた。SRと同大は2020年2月、環境保全や観光ビジネス、見沼田んぼに関する包括連携協定を締結している。

冒頭で石井大貴学長が「連携締結後の5年間は『光陰矢の如（ごと）し』。22年から本格的な活動が始まり、充実した事業により、地域の活性化に大いに貢献できたのはないか。地域企業、住民の皆さまとの連携をさらに強固にし、地域の発展に寄与することを祈念する」とあいさつ。その後、同大教員が地域活性化で担う大学の役割について講義した。

企業の役割についてはSRの荻野洋社長、「しょうがのむし」の周東孝一代表、合同会社十色のサカール祥子代表が講演。荻野社長はこれまでの取り組みや失敗談に触れ「チャレンジ精神と知恵とアイデアで乗り切ってほしい」と学生を激励した。

活動実践報告では同大経済経営学部一戸真子ゼミの学生がこれまでの企業訪問や地元イベントへの参加記録をスライドを交えて紹介。「地域の企業や皆さまとの交流、意見交換を通じ、物事に対するさまざまな見方や考え方を学んだ。物事を実践することは難しい。活動を通じて学んだことを糧に、今後の活動に生かしたい」と報告した。同ゼミ長で同学部3年の土田拓海さん(20)は「在学中に社会人との関わりを持てたことは貴重な経験。仲間の役割分担や取りまとめは難しく、今後も皆の声を聞き、学年を超えた活動を展開したい」。同副ゼミ長のピロゾ・シャフィナさん(20)は「地域や企業の皆さんに自分の意見を伝えることは難しく緊張もあった。異なる意見があった時にどう取りまとめるか、さらに事前調査を徹底するなどし臨みたい」と感想を話した。

（新井護）